唐代肅闕新城の位置と長安西北部の唐代交通路に関する一論

— Corona 衛星写真の判読と現地調査による検討—

安田 順 恵

キーワード：囲郭、Corona 衛星写真、シルクロード、唐代、肅闕新城、薬城

I はじめに

隋末から唐代の僧玄奘は、中国からインドへ取締った旅をし、帰国後「大唐西域記」を著した。法師が辿った全行程について、水谷真成、長澤和俊らが地図上に示したルートが定説とされて
いる。そのうち、蘭州（甘肅省）から長安（陝西省、現西安）に至るルートについては「大唐大慈恩寺三蔵法師縁起」に往路は詳しく明記されているが、帰路の記述がないため、従来同じルートを示した長澤の付図が発表されているのみである。

筆者はこれらの定説に疑問をもち玄奘の帰路のルートの可能性を、この地域における唐代交

1) 玄奘（600年又は602年～664年）は中国洛陽郊外出身。629年夏、国禁を破って長安から出国。西域を経てインドへ求法の旅をする。645年多くの経典などを持ち帰り帰国。長安大慈恩寺その他に住持し、1335巻の経典の翻訳を果した。それらの経典は現代に至るまで仏教の伝播に重要な役割を果しているので、玄奘の17年に亘る西域・インドへの旅を「取経の旅」という。
2) 645（貞観19）年1月24日長安に帰着した玄奘は、2月1日に洛陽宮に宮中興行に対して太宗皇帝に拝謁し、西域経験をもとにそのような観をしかった玄奘によっ
て記された経典を一冊の本にまとめたものである。玄奘は聴講に参加した。玄奘は高僧弁機の協力を得て「大唐西域記」一部十二巻を完成し464（貞観20）年7月17日に奉呈した。
3) 玄奘（水谷真成訳）。『玄奘三蔵の旅 大唐西域記1』、平凡社、1983、付図267頁。『同左2』、平凡社、1983、付図246頁。
4) 慧立／彦悰（長澤和俊訳）『玄奘三蔵—西域・インド記行』、桃源社、1978、付図381頁。玄奘の弟子慧立と彦悰によって記された玄奘の伝記「大唐大慈恩寺三蔵法師緣起十巻」の現代語訳。玄奘著「大唐西域記」の簡単な記述なども掲載の伝記として最も詳しくかつ正確な記述とされている。地図、地名などについては、長澤は、Samuel Beal : The Life of Hsiien-tsang, 1888、London rep. 1914に従ったと記している。
5) 前掲1）185～188頁。
6) 前掲4）付図。
通路を検証することにより、特定できるのではないかと考え研究を進めている。

当該地域において唐代に発達していた交通路を明らかにする方法として、筆者は後述のCorona 衛星写真の利用により城郭の有無を確認する方法を探った。なぜなら、城郭の有無が州、県の存在に繋がり、これらの城郭の連なりが交通路となりうる可能性に着目したからである。

唐代では州県制により統治されていたことは広く知られている。またその特色について、日野開三郎が「厳重な城坊市制度を以て強く規制され、（中略）多少の例外を除く外おおむね城壁を縦走していた」と記述している。

一方、広大な当該地域における唐代交通路に関する情報は乏しいが、唐代交通路の研究で知られる厳耕望はその著「唐代交通路考」付図において、当該地域での唐代交通路の一つとして、長安一中華間のルート（関内道の一部）を示している。厳は「唐書」および「元和郡県志」の二文献史料に基づいて、このルート上の李章隆に「薬関新路」と設定したと特徴し、このルートが唐代重要路であると記している。

筆者は唐代交通路を比定する重要な手がかりとして、厳の指摘の薬関新路の地理的配置に注目した。なぜなら、この関が皇帝に奏上して設置されており、このことは、唐代の交通路の中でも要路であることを示唆し、薬関新路の位置を比定することが出来れば、唐代の長安から西域に向かう主要な交通路を考察する上で、重要な手掛かりが得られるものと考えるからである。

小稿においては、特に前記二史料から解釈される「薬関城」や「薬関新路」についてCorona 衛星写真の処理を通じてその位置の比定を行い、交通路との関連に焦点を定め、唐代交通路の考察さらには玄奘の帰路のルートへの展望を行いたいと考える。

II Corona 衛星写真による関郭の判読

（1）Corona 衛星写真の利用と研究対象地域

1995年に一般公開されたCorona 衛星写真は、東西冷戦時代に米国が軍事観察のため撮影した写真である。その内KH4A シリーズは地上185km から撮影され縮尺30万5000分の1 で、約20km 長さ265km の範囲が一枚のフィルムに収まっている。最大地上解像度が約3m でスポット衛星の10m を上回り、実体視も可能である。空中写真の代替資料としての利用価値は大きく、米国地質調査所（USGS）から、インターネットで入手できる。

このようなことから西アジア、中央アジア、東アジアなどを対象地域として千田穣・小方登・相馬秀廣・出田和久の各氏の研究をはじめ、

7) 社田順助「玄奘三蔵法師取経の旅並びに大唐西域記に関する地理的解明と検証」の文化研究所研究報告 No.10, 2001, 39－53頁。2) 安田順助「CORONA 衛星写真の判読による玄奘三蔵の武威－長安間の復路に関する研究」日本地理学会予備集75, 2002, 202頁。
8) 日野開三郎「唐書薬関の分野体制」「東洋史學論集第19巻」三一書房, 1980, 27－31頁。初出は「（支那史の軍閥）束本, 三省金堂, 加藤敏, 和田清, 石田幹之助監修, 東洋文化叢刊, 明和17年, 本文250頁）との記載あり。3) 341－350頁。初出は（「東洋史學論集第17巻」三一書房, 1992, 260－261頁。初出は（昭和43年7月頃を記念して私書版として出版）。
9) 日野開三郎「都市と農村」「東洋史學論集第13巻」三一書房, 1993, 284－285頁。初出は「（東洋史學論集第17巻」三一書房, 1992, 260－261頁。初出は（昭和4年7月頃を記念して私書版として出版）。
10) 勝村隆「唐代交通路考」中央研究院歷史語言研究所, 1985, 付図6地
11) 田鶴雄「唐書第四冊巻三七」中華書房, 1986, 977頁。
12) 賀城編「長安四書全書, 史部, 元和郡県志巻一至三」, 468頁。
13) 前掲2) 202頁, 226頁。
空中写真が簡単に入手できない中国においては、広大な対象地域の情報を得るためにCorona衛星写真が最も有効な手段であると考える。しかも近年の中国では開発により急速に地上的景観が変化しており1960年代に撮影されたものが大部分であることから貴重な歴史的情報を得ることができる。

さて、小稿の研究対象地域は、前述のように蘭州～長安間で史料にみえる唐代藩閥新城の位置比定にかかわる黄河支流の清河水流域とする。行政区域としては中国寧夏回族自治区に所属し（第1図）、自治区の南部三分の一付近を黄河が東北流し、自治区南部では六盤山脈（最高峰米缸山2942m）が中央に連なり涇河と涇河の分水嶺を成している。清河水は、六盤山脈から東流する支流をあつめ北へ流れ黄河に注いでいる（第2図）。

筆者はCorona衛星写真の判読によって、蘭州から西安（長安）への諸ルートにおける「圍郭」の分布を判読している。前述の日野のいう「城壁に囲まれた城郭」にあたる場合もあるが、土塁で囲まれた空間が都市や村落のみならず農耕地やときには墓地などの場合もあることから、筆者は「圍壁に囲まれた空間を圍郭」と称することにする。

古代中国において、圍郭集落や城郭都市の形
事変時附属建造物として築城（一名月城）。馬面、羊馬城などがある。いずれもより強固に城を守るための防禦施設である。

築城は、外敵の侵入を容易にさせないために城門の外にさらに囲らせた一重の城壁をいう。直門式や曲門式がある。築城の出現は5世紀にさかのぼり、最も古い例として愛宕元は陝西省最北の統万城を紹介している。馬面は城壁面の外側に一定の間隔をおいて設けられた張り出しである。「城下に迫る敵兵に対して城壁上から矢石等による攻撃に死角がなく、防城効果が数段高められる」という。馬面も前記統万城にみられる。馬面の間隔が短いほど重要な守りであることがわかる。羊馬城は築城や馬面のような規模の大きいものではなく人の肩位の高さで、戦闘時に臨時に築かれた土塁をいう。一般的には城壁の外側に埋められた塼塩の土を敷いて築いたものであり特に重要なものでは二重、三重に張った所もある。この溝に多数の兵を配置することにより防禦効果を高めた。以上三つの防禦施設は、その出現は非常に古いが特にこれは唐代に最も典型的に見られる築城法であった。小稿研究対象地域の囲郭にこのような施設がみられるのは、唐代またはそれ以上に古い時代形成をも考慮に入れることが出来ると考える。

Corona衛星写真によって確認したこれらの囲郭の形成時期などに関して得られる情報や資料は皆無に近い。

17) 田中浩はその著において、加藤繁の「隋唐の城、北狄防備の為に北辺に作られたのが最初である」との文を引用している。また「築城や羊馬城は、唐宋時代に盛行したとするむきがおり、中には築城の検出をもってその遺構の年代判定の基準に用いられる例もある」と記している。
18) 前掲9) ②260～261頁。
19) 愛宕元『中国古代都市の興衰』（中央公論社、1991、96～100頁）。
20) 前掲19) 99頁。
21) 前掲19) 97頁。
22) 前掲8) 276～277頁。初出は〈青木秀雄〉第26巻、京都帝国大学法文学部、一九三六年十一月の記載あり。
23) 前掲19) 126～127頁。
24) 前掲9) ①405～416頁。
Figure 3. Location of walled cities.

Figure 4. Liwangpu: Stereographic image of Corona Satellite Photographs taken on March 31, 1965. Photo available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, U. S. A.

Figure 5. Result of interpretation of Corona Satellite Photograph at Liwangpu walled city.
による検討 小稿の研究対象地域において黒河の
いう長安～中寧間では、隕星城や隕星城の比
定に関わると考えられる図郭は Corona 衛星写
真の判読により四箇所確認できた（第3図）。現
地調査の結果をふまえて検討するため以下にそ
の具体的状況を述べる。

(1) 李旺堡の図郭（第4図および第5図）
李旺堡は、隕星隕星城と特定した集落であ
る。清水河の流域が東西の両側の山地によって
狭められた段丘上に位置する。

Corona 衛星写真の判読によると、清水河の
西側（左岸）、河に平行して南北500m 弱、東西
約300m の長方形の図郭が存在する（第4図、第
5図 A-D-E-G）。さらに詳しくみると、北側に一
辺が300m 弱の北図郭（第5図 A-B-F-G）、南側
に一辺が約200m の南図郭（第5図 C-D-E-F）
の正方形の図郭が2つ連結している。この2つ
の図郭の連結部分の図郭が明瞭でないため、全
体として長方形の図郭のようにも見えるが、こ
の南北2つの図郭の隣接部の西側には、鍵形の
土塁らしさものが読み取れる（第5図 B-C）。

北図郭の周囲三方は高い崖になり、西中央部
付近は図郭が西側に大きく半円状に張り出て
いる（第5図 A-B）。この張り出し部分は巨大な
馬面の要素を備えた図郭の跡と推定される。こ
れに内側に沿って底幅約3m 位の堀があり西
に張り出している。張り出した堀の内（東）側
には土塁状の高まりが続いているが羊馬城の
址である可能性が高い。また南図郭は北図郭に
比べて一段低い位置にあり、図郭は不明瞭で
あるが、南西部には鍵形の図郭が判読される（第
5図 D）。

さて、李旺堡図郭の北側と南側には、西から
の開析谷が清水河に東流している。これらの谷
を利用して図郭が形成されたと考えられる。こ
のことからも清水河が李旺堡図郭の西側に河道
をとっていたことは地形的に考えられない。従
って『元和郡県志』の記述にある河の東側とい
う条件には合致しない。しかし図郭、馬面や羊
馬城などをも兼ね備えた防護に優れた図郭であ
る。

北図郭は東側道路から7～8m 高い上位の
段丘面にある。住民はその図郭を利用して住居
を構えている。西向き図郭対面部に高さ約3m、
幅約5m の城門跡が Corona 衛星写真での判読
の通りであった（第12図）。図郭部分から坂を東
へ約100m 下りると、図郭と同心を結ぶ南北に
延びる現在の幹線道路があり、さらにその東側
に道路を平行して清水河が北流している。現在
の李旺堡集落はこの幹線道路沿いに商店などが
あり、賑わいと活気を満ちた地方の商業中心地
の景観を呈していた。

(2) 高崖郷北の図郭（紅古城）（第6図および
第7図）
高崖郷は、李旺堡の北約20km に存在する郷
で、この図郭は、現地では紅古城と呼ばれる遺
跡であった（第3図参照）。以下一連の図郭群を
総称して、高崖郷北図郭（紅古城）と呼ぶ。Co-
rona 衛星写真で、一辺がそれぞれ約350m （第
7図 A-B-C-D 以下350m 図郭と称す）、約660m
（第7図 E-F-G 以下660m 図郭）、約540m（第7図
H-I 以下540m 図郭）の長方形の図郭が判読される。
この350m 図郭と660m 図郭の東側と北側の
図郭は共有してほほ入れ子状を呈し、それぞれ
の図郭の南側は大きさの異なる3 個の図郭が重
なり合っている。

350m 図郭は東側図郭が住宅に近い間が不
明であるものの、その三方は輪郭が明瞭である。
北側の図郭には半径約60m の図郭が存在する。
またA 地点から東面の北図郭に馬面が2つ見

25) 本来は図郭の一部の図郭であったが、現地で断片的で連続性のないものを土塁ということにする。
Figure 6. Honggucheng (north of Gao’ai): Stereographic image of Corona Satellite Photographs taken on March 31, 1965.

Photo available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, U. S. A.

Figure 7. Result of interpretation of Corona Satellite Photograph at Honggucheng (north of Gao’ai) walled city.

第6図 武星写真による紅古城（高岳郷北）1965年3月31日撮影（左が後方視，右が前方視で実体視可能）

第7図 紅古城（高岳郷北）囲郭の判読結果
ている。この紅古城も北面に堀城や馬面を設置して北への防禦を固めている形態は同じである。

さらに南側に存在する一辺が約540 mの圍郭は南西の角と南東の角が判読できるが輪郭線はやや不明瞭に欠ける。輪郭線の明瞭なものとそうでないものが存在するが、現地で確認したところ、輪郭線が不明瞭でないものは築造が古く囲壁の崩壊が進行している。つまり、明瞭度の違いは囲壁の残存する高さや基底部の輪郭の明瞭さ等の差を反映しているようであり、建設年代の差が表れている可能性がある。350 m 囲郭および660 m 囲郭との間の西側には、激しく曲流する清水河支流の攻撃斜面に沿って囲壁を築いていることも確認できる（第7図K）が、河川を生かして防禦しようとした意図がみられる。その他にも囲壁らしいものが見られるものの、連続性が悪いことから大きな囲郭の中の境界を意味する一部ではないかとも考えられる（第7図）。

筆者がCorona 衛星写真上で、高崖郷北囲郭と特定していたところは、商業区のない広範囲に広がる農業地域である。紅古城では、囲郭は高さ3 m に及ぶ部分もあれば、1 m ぐらいの部分もあり、広範囲にわたって断片的に残存する。現地では囲壁間の繋がり具合などは不明確であった。Corona 衛星写真で判読された堀城や馬面はすでに現存せず、囲郭は現在では原形を殆どとどめないほど破壊されていた。囲郭のすぐ東部に近接して村落があり、囲郭の内側は広大な西瓜の畑として利用されていた。耕地中に出土したとみられる瓦や陶器の破片などが、畑の側面に盛り上げられ放置されていた。村落の話によると、出土遺物のうち大きなものや形状の整っているものは売却され村にはなく、古鏡や小型陶器類は自宅に持ち帰っていた。村人がこの地で発掘したと言って、筆者らに示した古鏡には、唐代の開元通宝をはじめ宋代の古鏡などが含まれていた。

前述の如く、紅古城囲郭を北から南東方向に横切る高速道路の計画があり、発掘に参加した鍾氏によれば、2003年11月23日から12月15日まで、延べ300人の寧夏文書考古研究所紅古城考古隊によって発掘調査が行われた。考古学研究のための大規模な発掘は、当自治区では固原地域以外にはあまり例がない。

今次の発掘調査報告書は目下編集されつつあり正式には未公開であるが、筆者が見た小冊子によれば、漢代、唐代、宋代の三時期の土層が垂直的に重なっており、城門、井戸、かまど、住居跡、ごみ捨て場、建物の基礎、銅のついている銅の塊、糸を紡ぐ道具、人の手の跡の付いている煉瓦、大量の陶磁器の破片、鉄器、石器、骨器などが出土した。

Corona 衛星写真で判読していた囲郭の明瞭さの違いはおそらく絞り上げられた発掘結果から判明した漢代、唐代、宋代の時代に対応するのではないかと考える。李旺堡のように高い積尺の囲郭は残存していないが、かえって建設年代の古さを示唆しているともいえる。道路建設のための一部分の発掘ではあるが、紅古城以外の囲郭に比べて、考古学的な検証が可能である。

③ 関橋郷の囲郭（第8図および第9図）

高崖郷（紅古城）の囲郭から西側約15 km のところ、清水河支流沿いに関橋郷の囲郭がある。囲郭の南側には段丘崖が見られ囲郭全体は段丘面上に建設されたものと推測される（第9図）。関橋は、Corona 衛星写真では平面的に

26) 前掲19) 138～140頁。
27) 武発4（621）年から使用された。
28) 宋代の皇宋通宝。1039年に鑄造が開始された。
29) 数少ない発掘の報告として①原州聯合考古隊編「唐史遺跡解」原州聯合考古隊発掘調査報告1号」 勉誠出版、1999、336頁。
②原州聯合考古隊編「北周発掘」原州聯合考古隊発掘調査報告2号」 勉誠出版、2000、392頁がある。
第8図 Corona衛星写真による関橋堡1965年3月31日撮影（左が後方視、右が前方視で実体視可能）

Figure 8. Guanqiaopu: Stereographic image of Corona Satellite Photographs taken on March 31, 1965.

Photo available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, U. S. A.

第9図 関橋堡環郭の判読結果

Figure 9. Result of interpretation of Corona Satellite Photograph at Guanqiaopu walled city.

は3つの正方形が入れ子状に配置されているように見え、もっとも外側のものは一辺が約450mである。これをさらに実体視すると、外側の2つの環郭に見えたのは三重の掘割の堤で、一番外側の環壁（第9図D-E）の内側は底幅約10m位の水堀となっていることが判明した。水堀は環郭の北西の部分で環郭の北西方に流出する水路が追跡できるが（第9図W）、環郭の北東から南に行く水堀は、河川の側刻により不明である。また南西部分での水路も不明である。

水堀よりさらに内側は、底幅約15m前後の空堀をもつ環壁が二本ありこれは羊馬城の址と判読される（第9図EとF）。また、詳細に観察すると一番内側の環郭（第9図A-B-C）は高く北と南に半径約60mの環城（第9図I）が存在し、四辺の環壁に馬面が整然と並んでいるのが
判読できる。囲郭の南東部が河川により一辺約150 m の三角形状に激しくへがり取られている。正方形の囲郭の西北、東南の対角線延長上の河川対岸約600 m のところに、基底部が約100 m 角の烽火台が判読される。

現地では、Corona 衛星写真で判読したものとほぼ同じ状態の囲郭を確認することが出来た。すなわち、囲郭の南東隅が河川浸食によりへがり取られているものの、囲郭は農民たちによって壊されることなく、半径約60 m の城壁も南北二箇所現存していた。またこの河川の対岸には Corona 衛星写真で見た通り、高さ約10 m の烽火台も確認出来た。

当初外側の二重の囲郭に見えていた部分は、現地調査の結果、実体視での判読結果のように掘割とそれを囲む堤であった。正に羊馬城の址である。囲郭の外壁には、馬面が Corona 衛星写真で確認された通り残存していたがここではその間隔が非常に短い。このことは強固に防禦された囲郭であったことを示唆している。高さ約7 m、厚み約5 m 位の城壁の半円形の城壁も南北2 ヶ所ともよく保存され、北の城壁は西側から、南の城壁は東側からそれぞれ道路が囲郭内に通じている（第13図）。

囲壁内の現況をみると、集落は存在せず、囲郭外に住む農民たちがこの正方形の約20 ha の囲郭内を全面的に農地とし耕作機や小型トラックなどを駆使して、西瓜、小麦、とうもろこしなどを栽培している。整然とした畑の区割がみられるが、区割の小道はおびただしい瓦や日干しレンガ、陶器片などの文部によって敷きつめられ、またそれらの物は側壁に積み上げられていた。彼らにとってそれらの文は農耕の邪魔になる瓦礫にすぎないのであろう。鍾氏と共に採取した中には唐代の日干しレンガや陶片が多く、紅古城でのものと同じ種類と見做されるものが多数あった。積み上げられていたおびただしい瓦は囲郭の特徴を示す紋様が裏面にあった。これだけの大量の瓦の存在は少なくとも当時には相当の人口を擁していたものと推定される。

関橋国の囲郭は二重の羊馬城をめぐらしていただることからも軍事拠点ということではなく城郭としても重要な位置にあったと考えられる。乱世の時代の陶片などから、遺跡の年代がある程度特定出来る可能性に加え、囲壁や城壁や馬面が原形をとどめて遺存していることからも唐代に存在した可能性も考えられる。

④ 高崖郡南の囲郭（草塚古城）（第10図および第11図）

高崖郡北囲郭（紅古城）の両約 5 km の広い段丘面の上には、直角三角形に近い平面形状の囲郭が存在し直線や縦形の土塁が判読できる。四角形の囲郭の全容は不明瞭であり土塁の残存と推定される高まりが散在している。この広い段丘面では、東側の河川に沿って土塁状の高まりがみられる。西側には幅約30 m から100 m、長さ約200 m の中央に橋があるくぼみが、緩やかな低所の内（東側）に掘られている（第11図1）。二つのくぼみの間には細長い高まりがつくりられている。このような形状は、かつての掘り込み港を彷彿とさせる（第11図J）。Corona 衛星写真で見ると、河川は、この広い囲郭平面の東側に流路をとり、西側は両端を閉じられ、旧流路のように壊状の緩やかなS字形を呈する凹地となっている（第11図G-H）。この水路の南側には、不規則な土の高まりがみられる（第11図K）。流路変更がなされたのか否か詳細は史料的には不明ながら、橋や、水路や、船舶を送る水路を見ると、遺跡の痕跡に非常に興味深い情報を読み取ることができた。南部には、東西約1350 m に及ぶ明瞭な囲郭がみられる（第11図C-D）。さらに、南北に流れる水路を囲んで、ほほ方形と判断できる一辺約540 m の囲郭が確認できた（第11図A-B-E-F）。ここで重要な点は、この囲
第10図 Corona衛星写真による草場古城（高要県南）1965年3月31日撮影（左が後方視、右が前方視で実体視可能）
Figure 10. Caochenggucheng (south of Gao'ai) : Stereographic image of Corona Satellite Photographs taken on March 31, 1965.
Photo available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, U. S. A.

第11図 草場古城（高要県南）の囲郭の判読結果
Figure 11. Result of interpretation of Corona Satellite Photograph at Caochenggucheng (south of Gao'ai) walled city.

郭では李訣堡や高要県北（紅古城）の囲郭と異なり、単独の郭郭から構成されている。

Corona衛星写真上で判読した上記の囲郭は、現地では草場古城と呼ばれる遺跡であった。囲郭の規模は広大で、囲郭には高さ約3mで強固なものや約2mのものなどが、まるで曲尺のように残存している。囲郭内はほぼ全面が農地になっているが、一部囲塁の上に漢族の寺院が、唯一この囲郭内の建物として存在する。圍塁は、村落に近いところはほとんどと崩され、平坦な農耕地にされ、Corona衛星写真で判読された長さ約1.35kmの長大な圍塁はその西側部分のみ残っていた。

また囲郭の西側の、閉じられたS字状の凹地は、現地では畑と流れる水もゆかな幅約100m以上の河川となっていた。Corona衛星写真では河川の流路は東側にあるが、いかにも人工的な流路のようにも判読でき、囲郭の中央部や西側S字状など、旧河道ではないかと推測される。S字状水路の南の端に広がる不規則な土の塊については、鍾氏によれば古い時代の銅物処理や鋳造などが行われた処であった。

杉本憲司によると、河南省新鄭県の鄭韓故城（春秋戦国時代）や、山東省曲阜の魯国故城（西周から漢代）などにおいて、鋳銅所などが川べりに作られていたとのことであるので、この草
場跡に於てこのような痕跡が見られることについて、年代特定は出来ないまでも漢代にも
巡る可能性の囲郭であると考えられる。

港と推察していた部分は、全く残っていなかった。むしろ曲流する河川の側刻をうけていた。
農民たちによればこの遺跡内で発見された完形品の遺物はすでに村外などへ流出し、また側道
には石臼、大甕や鬼瓦などの破片が積み上げられていた。鍾氏はこれらの破片には、唐代のも
のが含まれている可能性を指摘していた。この遺跡は、囲郭の残存状況や散乱していた遺物の
年代幅の広さなどでから、この囲郭集落の建設は、
決して単一の時代のみに特定できるというよりは、時代と共に受け継がれ長期間存続していた
のではないかと考えるのが妥当であろう。

III 唐代蕭関新城の位置と交通路

（1）唐代蕭関新城の位置 中国では囲郭の歴史は新石器時代に巡るとされており、その存在は形態や機能と共に時代や歴史の発展を考察す

る重要な手がかかりであるとされている。

小稿の調査対象地域である清水河の河谷は肥沃で、現在、固原、同心、中寧などの都市が立
地する。固原からは唐代の貴重な文物が出土し、
西方からの人や物の往来があったことが分り、
当時の長安文化圏に属していたと考えられる。

したがって固原地区はいわゆるシルクロード上の
重要な、注目に値する地域でこれらの都市を
結ぶ清水河沿いの交通路は、唐代においては長
安から河西回廊などへも通じる重要な幹線道路
であったと考えられる。しかし同時に北方から
突厥族などが容易に侵入する道でもあった。そ
のためにこの交通路沿いの地域は常に軍事的緊
張下におかれ多くの新城や軍事施設が配置され
ていたものと考えられ、当初大業元（605）年
に設置されたとされる蕭関城はこのような当時
の事情を反映したものとみることができる。

唐代蕭関城に関する記述は、『新唐書』第四
冊 巻三七、および『元和郡県志』巻三に次の
ようにある。

31) 前掲19) 3頁。
32) 前掲29) 1, 2)。
33) 前掲『固原南郊隋等墓地』文物出版社、1996. 262頁。
34) 前掲10) 『新唐書』第四冊巻三七の文中にある「以突厥降戸云々」により突厥族の捕虜の存在が明らかである。突厥と
の攻防が窺える。
35) 前掲11) 969頁。
36) 前掲12) 163頁。
大中五年以原州之薫関置。中和四年僑治棚原、縣一。薫関。中。貞観六年以突厥降戸置縁州、治平高之他樓城。高宗置他樓縣、隷原州、神龍元年省、更置薫関県。白薬軍在薬茹水之西、至德後没吐蕃。〔「新唐書」第四冊 巻三十七、ただし、カッコ内筆者〕

（読み下し）

大中五（851）年原州之薫ヲ以テ関ヲ置ク。中和四（884）年原州ヲ僑治ス。縣一ツ。薫関。中。貞観六（633）年突厥ノ降戸ヲ以テ縁州ヲ置キ、平高ノ他楼城ヲ治ム。高宗（649年－683年）他楼県ヲ置キ原州ニ隷セシム。

（読み下し）

薫関県 本隣他楼縣、大業元年置神龍三年廢、別立薫関縣、以去州聞、御史中丞侯全徳奏、於故白薬軍城置、因取薫関為名。薬茹水在、縣之西一名薬釐河、源出原州西南薬莎山下。（「元和郡県志」巻三、ただし、カッコ内筆者）

しかしCorona衛星写真によると、李望堡の囲郭は現清水河の西側に位置している（第3図参照）。かつて李望堡の囲郭が清水河の東側にあり、流路変更が起こった現在のようにした可能性は、旧ソ連製20万分の1地形図やCorona衛星写真から判断する限り考えられない。薫関新城は前記二史料から、河川は西側に存在すると厳は記述されておりながら何故李望堡と特定したのかその根拠は不明である。少なくともこの二史料による限り厳の位置比定は不確かなであっても、李望堡北とする方が同様に根拠は明確ではない。

また、上記史料に見える唐時代薫関郡は『元和郡県志』ではもとは隣の他楼県であったとみえ薬茹水は清水河のことであり、清水河流域の小稿の研究対象地域に位置したと考えられる。そこで前章における各囲郭の検討結果をふまえて本章で唐代薫関新城の位置に関して検討を進めることにしたい。
まず、薬関新域は「元和郡県志」によれば葦
塚（現清水河）の東岸に位置する。その点に
おいて紅古城の西側には現在大きな河川が見ら
れるが、清水河の支流である。草場古城はその
西側に清水河が現在河川と流れているが、Co-
rona 衛星写真では流路は囲郭の東側になって
いる。李旺壠は清水河本流の西側に位置する。
いずれにしても Corona 衛星写真で判読した四
箇の囲郭のうち、草場古城以外は清水河本流の
西側にあって「元和郡県志」に記載された通り
ではない。

但し紅古城と草場古城においては、単に河川
の東側というのではなく現実に囲郭を浸食する
くらい接近して両者ともに、囲郭の特色付けに
河川がかかっていることは前述の通りであり
河川との関係を現実的に見るならば、史料の条
件に合致するものであるが、決定的な証拠とは
なりえない。その築造年代は明確ではないが、
前述のように部分的に発掘調査が行われた紅古
城については、唐代および宋末遺物の散乱がみ
られるとともに発掘により漢代、唐代、宋代の
三時期の土層の存在が明かである。さらに唐
代の囲郭に付随することが知られている薬城や
馬面が存在している。したがって唐代にこれら
の囲郭が存在していた可能性は大きい。これに
て草場古城は前述のようにこの地で散乱す
る遺物に唐代のものも含まれているものの、唐
代にこの囲郭が存在したことを見ることは大いに
示す資料は乏しい。

（2）唐代薬関新域と長安西北部の唐代交通路
過去のように薬関新域の候補として、紅古城
と草場古城の囲郭が挙げられるものの、現在の
ところ前述のような各囲郭の状況から判断する
と前者（紅古城）の可能性が高いといえそうで
ある。いずれにせよ両者の距離は約 5 km の近
くにある清水河流域の近接した囲郭である。こ
のような河谷平野に薬関新域が設置された意義
は大きく、河谷に沿う交通路が存在していたこ
とも示している。唐代に長安西北部の地域にお
いてさまざまな交通路が発達していたことは、
厳の『唐代交通圖考』の付図に詳しいが、必ずし
も当時の交通路をすべて網羅していたとは考
えられない。

実際に玄奘の通過した道や、西域や長安から
の人や物の往来した道などいわゆるシルクロ
ードとして西方へと通じる国際的交通路もある
れば、唐朝の貴族や役人たちの長安往復の長安
文化圏内の交通路をはじめさまざまなレベルの
交通路がありそれらを網羅することは不可能に
近いであろう。

しかし筆者は、これまでに Corona 衛星写真
上で多くの囲郭の存在を確認し、それらを繋
ぐことによってさまざまな交通路を抽出する可能
性について検討するとともに、分布する囲郭の
規模や形態等から各交通路の重要性をある程度
探ることができるのではないかと考え、ローカ
ル的な交通路と唐代の国際的交通路に区分する視
点から若干検証している。

国際交通路としてのシルクロードを考えると
で、どこで黄河を渡り、どこで六盤山脈を越え
るかは大変重要なキーポイントである。この清
水河ルートでは六盤山脈を越えることなくその
東麓を北に進み、固原を経て中寧で黄河を渡れ
ば西域への道は容易である。筆者が検討を進め
ている複数のシルクロードのなかでも、このル
ートに分布する囲郭の規模は比較的大きく数箇
も多い。薬城、馬面を備えた囲郭が多く防禦体
制もかなり厳重であり唐代には重要な交通路で
あったことが推定できた。

その上皇帝の命により設置されたという薬関
新域の存在は、さらにこのルートの重要性を強
調するだけにこの新域の位置比定は交通路の検
討に加えて、歴史的も重要な意義を持つものと
いえるであろう。
IV おわりに

以上、Corona 衛星写真を利用した囲郭の判読手がかりとして現地調査の結果も交えて、長安西北部黄河支流清水河流域における唐代魏 関新域の位置および交通路に関して、西域への唐代交通路との関連にも注目し若干の検討を行った。その結果、唐代関新域は巖の説く李駿 堡ではなく、高麗興にある紅古城の囲郭である可能性が大きいことを指摘した。ただし、草場古城についても魯が説くように宋代の建設と断定するにはやや早計に過ぎ、Corona 衛星写真 の判読によれば複数の囲郭の重なりは認められなかったものの平坦で広大な農地とされている遺跡のなかに削平された古い囲郭が埋れている可能性は否定しきれない。また、壇域や馬面はみられないが宋代をさかのぼる遺跡である可能性も残っており、新しく建設された唐代関新域であった可能性を留保しておく必要がある。

ところで、先にあげた『新唐書』に「白草軍ハ蔘茹水ノ西ニ在リ」とみえる「白草軍」は、蔘茹水すなわち清水河の西にあるとする地理的 位置から関橋堡の可能性が考えられ、さらに『元和郡縣志』に「白草軍」とみえることか ら、単なる軍事基地とするより囲郭集落として位置付ける方が適切ではないかと考えられる。壇域、馬面、羊馬城などを整然と備えていた関 橋堡の状況は、その可能性を支持するといえよう。ここでは資料上の制約もあるので可能性の 指摘にとどめ、詳細な白草軍の位置などの具体的な事実関係については今後の課題としたい。ただ、関橋堡は上記のことから唐代における相当重要な交通路上の囲郭であったと考えられ、紅古城から関橋堡へ至る交通路は西方へのシルクロードにも関わるものである可能性も考えて おきたい。

小稿で使用したCorona 衛星写真は1965年撮 影であり、その時点で存在していた遺跡の上空からの情報であるので、その後の地域開発によ り囲郭が取り壊された場合もある。小論で 見た紅古城や草場古城のような例もあることから、次第に貴重な遺跡の存在そのものも不明になっていくことも懸念される。当該清水河沿いのルートは、長安から西域へのシルクロード としての最も重要な位置を占めるところであり、筆者がすでに想定した玄奘の帰路のルートとす る可能性を含んでいる。

以上みてきたように、Corona 衛星写真の利 用による唐代における西域への交通路の解明へ のこの新しい試みが、資料が少なく研究も少ない 長安西北地域における唐代交通路の研究の刺激 から望外の喜びとするところである。

[謝辞] 調査を行なうにあたり、中国寧夏回族 自治区人民政府対外友協の丁成元主任、劉仲会長、左軍副会長のご協力のもと終始ご指導いただいた 郭迎麗女史、寧夏博物館元館長鍾仏先生、蘭州大 学楊建新教授に心からの御礼を申し上げます。終 始あたたかく御指導くださいました奈良女子大学相馬 秀輝教授、出田和久教授、また御書門立場から有益な御教示をいただいた早稲田大学長澤和俊名誉 教授、滋賀県立大学営谷文則教授、奈良女子大學 松尾良樹教授に深謝します。英文要旨作成にあ たって御言下さったアラバーマニア・史代女 史に感謝の念を表したいと存じます。

（奈良女子大学・人間文化研究科・院生）

41）前掲38）の執筆に当たった寧夏出身の魯氏は筆者に対して「草場古城は宋代の建設！」と強く断定された。宋代にも交通路として重要であったこの地域のことを前掲38）310頁および325頁に記載されているが、「草場古城」と特定しての記 述はなされていない。発掘調査が待ちわれる。
A preliminary Report on the Location of Xiaoguan Xincheng Fortified Town and the Traffic routes in the Tang Dynasty at Ch’ang-an’s northwestern area: With Interpretation of Corona Satellite Photographs and a Field Investigation

YASUDA Junkei
Graduate Student, Nara Women’s University

The author checked the full routes traveled by monk Xuanzang 玄奘 between Ch’ang-an 長安 and India during the period from the end of the Sui 隋 dynasty to the early Tang 唐 dynasty. Three routes from Lanzhou 蘭州 to Ch’ang-an, on the way return, are noted with special remarks as a highlight of this study on the monk’s seventeen years journey to India. Although no final conclusion was made from my study, I indicate, however, one of them as a target to be seriously considered.

I found descriptions of the geographical location of the ancient town of Xiaoguan Xincheng 蕭關新城 in two old books, XIN TANG SHU 新唐書 and YUAN HE JUN XIA ZHI 元和郡縣志 by which three routes could possibly be verified.

These routes are important Tang dynasty traffic routes from Ch’ang-an to Lanzhou via Guyuan 倡原 that follow the Qingshui River 清水河 northward along the eastern side of the Liuban Mountain Range 六盤山脈. As for the location of Xiaoguan Xincheng fortified town, historians like Prof. Yan Gengwang 嚴耕望 in his book, TANG DAI JIAO TONG TU KAO 唐代交通圖考 (RESEARCH ON TRANSPORTATION ROUTES OF THE TANG DYNASTY) specify the location to be at Liwangpu 李旺堡 at the northern part of Guyuan District in Ninxia Hui Autonomous Province 宁夏回族自治区.

Although he also used the aforementioned old book that state that Xiaoguan Xincheng is on the east side of the river, he declared Liwangpu to be the site of ancient Xiaoguan Xincheng despite the fact that, in actuality, Liwangpu is located on the western bank. Therefore, the author checked Corona Satellite Photographs in detail and found three other sites, located Guanqiaopu 関橋堡, both north (Honggucheng 紅古城) and south (Caocenggucheng 草城古城) of Gao’ai Township 高崖鄉.

The relic site located some 20 kilometers north of Liwangpu in the area north Geo’ai is of a remarkable large scale with walled city. And these are, as written in the two old books, on the eastern bank of the river, proving the information to be true. Having succeeded in reading the Corona Satellite Photographs, the author took an field investigation to the area in February 2004. When, by good luck, the area north of Gao’ai was being excavated for highway construction since December 2003.

At the site known as Honggucheng, they found ruins from three periods from the Han 漢 dynasty, the Tang 唐 and the Sung 宋. Based on the above mentioned, the author finally considered that this Honggucheng site is the Xiaoguan Xincheng fortified town of Tang, and dismissed Liwangpu.

Fragments dating from the Tang dynasty found in various ruins in the area, told the author that the area had been a very important place for traffic in Tang times. Information produced from research of Corona Satellite Photographs and on the field investigation of the site, pushed this study forward and shall be carried on by similar attempts in the future.

Key words: Walled City, Corona Satellite Photographs, Silk Road, Tang Dynasty, Xiaoguan Xincheng fortified town, Wengcheng Gate.